



夜
さ
り
の
庭

篠崎琴子

名残の花が影を落とす、あざやかに晴れた卯月の午后。透くほどに磨かれた硝子の向こう側からは、年古りてなおしかと息衝く桜枝が、真白いレエスの帷越しにあめつちの春を垣間見せる。然れども、明けく麗やかな伯爵家の窓辺に、彼はいささか似つかわしくなかつた。

「J'ai entendu dire que vous parliez couramment la langue de mon pays. Je suis très heureux et honoré d'échanger des mots avec vous」

たとえ今日、東京は広尾の洋館を本邸とし、飾り棚やら長椅子やらが揃えられた応接間へと客人を迎え入れようと……葉澄家はそも古くには、公卿として帝の側近に仕えた血筋である。

御一新を経てからは華族と呼ばれ、また大正も十五年目を迎えた当世にあつてはいくらかの旧大名家、勲功者、果ては国内でも有数の財閥として名を高めている万里川とさえも縁を結んでひさしいが……連綿、千年のながきに渡り、京の都で御簾の奥に生きながらえてきた家柄である。しかしその末裔の姫が今、遠く海果てからやって来た外

つ国の男と相對して、じかに言葉を交わそうとしている。

「Comme vous l'avez peut-être déjà appris par Monsieur Marikawa……」

栗色の髪を当世風になでつけた青年の所作や姿勢、装いこそは洗練されていたが、若い彼の足元だけは、手入れされてはいるものの少々たびれた風情の革靴だった。聞けば成人して間もない学生であることだし、その故国から横濱港まで、遠路をはるばる辿り来た以上は仕方のないことではあるが、葉澄伯爵家のような堂上華族の本邸を訪ねるにあたつてはいささか格が不足である。

それでも彼女が知らない世界を生きてきた男が口ずさむ言葉は、流麗ながらにして鋭く、さながら古の御所の御簾を跳ね上げた花風のように、葉澄宵子の耳を打った。

「Je cherche un comte japonais appelé "Asa"」

慣れない拍子で音が弾む。しつとりと低い彼の声音と、その形のよい唇の動きへ必死に追い縋るうちに、宵子はさながらレコードでも聴いているかのような錯覚に陥ってゆく。いつだったかの語学講義の折に師の邸宅で鑑賞した、横笛も笙も鼓も不要の異国の音楽。——けれどその感覚は正しい、と。歌うように紡がれ続ける言葉の波に溺れかけ

ながらも、彼女はしとやかな織りの綸子りんすの袖を少々なおすかのようにして、膝上で行儀良く指先を組み替えた。

なにせ目の前のこの男——マリユス・フォレストイエが宵子へと熱心に口にするのは、あの歌声が愛だの恋だのを高らかに語りささやいたのと同じ、遠く遥けきフランスの言葉なのだ。

「あの、Excusez-moi……もう少し、ゆっくりと話していただけないかしら……？」

失礼。——昨年までは、伯爵はバりに滞在して、たらし、
「Pardon.——Le comte était apparemment à Paris, jusqu'à l'année
のですが、あつにく……」
dernière, mais il est malheureusement……」

宵子が頼むと、マリユスは幾分か語調をゆるめてくれはした。けれど彼女の語学力では、それでも単語を聞き取り意を汲むので精一杯。尋ねられたことを理解はしたが、彼が知りたいことについて記憶を辿り、その上で適切な返答を母国語ではない文章に組み直してやりとりを続けるにあたっては、どうにも技倆ぎりょうが追いついていない。

宵子は少しばかり拙い発音で「Veuillez patienter」とことわってから、客人の右隣の椅子でくつろぐ従弟……彼女のもとへと彼を連れてきた万里川伊行へ、ゆったりと視線をずらして話しかけた。

「申し訳ないけれど、わたくしには通訳というのは難しそう。会話はあまり得意ではないのよ」

「……然様さきようですか。どうしよう、困ったな。実は宵子様が頼みの綱だったんですが」

この春に十七歳となったばかりの少年は、常のような気安い仕草で頬杖をつけて眉を下げる。

「でも伊行さんも……その、先ほどフォレストイエ様を紹介してくださった時には、彼とは英語でお話なさっていたでしょう。それではやはり難しいの？」

「マリユスが堪能なのは英語と仏語なのです。ご存知の通り、僕もイタリアの言葉ならもう幾分か嗜みがあるのですが、イギリスの言葉は勉強中として最低限しか」

伊行は曖昧に誤魔化したのが、宵子はわずかばかりとはいえ彼の声音に滲み出る、疲労の色を察してしまった。

万里川本家の子息として学習院に通いつつも家業のためにと二種の外国語を修学し、また次男でありながら万一同のためにと跡取り教育まで仕込まれつつ、在日フランス大使からの口利きで屋敷へ預かることとなったマリユスに対しても、四歳ばかりの年の差など感じさせずになにくれとなぐ世話を焼く。そのうえ彼らが交わすのはどちらの母国語

でもない言葉。負担は相応にあるだろう。

……一定までの文法や語彙を学んでさえいれば、馴染みのない異国の言葉を扱ったとしてもある程度の意思の疎通は図れる。けれどその交流を会話と呼べるまでに発展させるには、話し手に相応の知識と経験が求められる。あるいは細かな意図を汲み取り、緻密な表現の違いから最大限の情報を把握するには、さらに技術と忍耐となによりも双方の努力となめらかな思考、そして時には厳密さが要だ。それらを併せ持たなければ、交わされる意思は正しい形では伝わらずに綻ぶ。

それこそ、この国の誇る舞楽芸能をことのほか好むフランスの大使と当時十五歳の未熟な伯爵令嬢がかつて拙い日本語で連ねた、もどかしくも曖昧な、そして宵子にとつては後悔と口惜しさと誤りに彩られた、能楽の舞台の魅力を説くための言葉たちのように。

「日頃は互いの勉強も兼ねてということで、英語と日本語をとり混ぜてのやりとりで間に合っているのですが……」
ふたりの様子から状況を察したのか、マリユスが灰がかった淡い黒眸を少々細めて眉根を寄せた。宵子はもどかしげな彼を見て少し悩んだが、ふと思いついて長椅子から

立ち上がり、父の収集品が整然と納められた飾り棚のひとつから、普段使いを一揃い拝借する。文鎮と便箋と、濃藍の深い色彩を含ませた万年筆——道楽の末にアメリカより輸入した、ウォーターマン製。

「筆記ならばいかがかしら。文章の読解は、会話よりはまだ得意なの」

——どうしても練習相手が必要な発音や聞き取りとは違って、筆記での構文と読解ならば文法書や洋書、そして紙と筆記具さえあれば一人でも研鑽を重ねてこられた。

宵子が西洋文具一式をマリユスへ差し出すと、伊行も英語で彼女の意を伝えた。客人が長い指で筆記具を走らせ始めたのを見守りながら、宵子は小さく息をつく。横書きで綴られていく文章は対面で逆さに垣間見てさえも、音で聴くよりもずっと理解が及んだ。力になってやれそうだ。

——訪問の打診の際にあらかじめ伊行からも伝えられていた通り、フランスからの客人であるマリユスはさる日本の華族を探しているのだという。

きっかけはまず、一九二五年の十二月……つい三月と少しばかり以前の年の瀬に、フォレスティエ家の面々が聖誕祭に集まった席で、マリユスが日本へと旅することが